

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

編集長 昆 吉則

## 平成30年問題で団塊世代のリタイアを考えよ

講演で必ず使うグラフがある。厚生労働省が終戦の翌年1946年から行なっている「国民健康栄養調査」の「国民1人1日当たりのカロリー摂取量」の年次変化である。進駐軍の指令によって始まったもので、アメリカは日本人がいかに飢えているかを統計的に明らかにし、自国の余剰農産物を日本に輸入させる根拠とした。確かに飢餓の最中にあつた当時の日本にとっては有難い戦勝国アメリカの支援だった。しかし、それ以後、日本の農業政策は常にアメリカの顔色を伺いつつ行なわれてきたというべきなのである。

このアメリカの戦略は、伊勢湾台風（1959年）をきっかけにした日本の養豚家に豚とトウモロコシを送った「美談」にも受け継がれた。それまで残飯を餌としてきた日本の養豚に、アメリカの種豚とその餌としてのトウモロコシをセットで日本に援助と言う形で売り込み、以後アメリカのトウモロコシ無しには我が国の酪農畜産が成り立たないと思わせる「刷り込み」が出来てしまった。僕が子実トウモロコシにはまって

いくきっかけになった2012年のA-1グランプリでの柳原孝二さんのプレゼンテーション。僕はその意義の大きさに惚れ込み、審査では同点の競争相手もいたが、主催者の強弁で審査員を説得して彼をグランプリに選んだ。その時、「アメリカからの圧力はないのだろうか？」と危惧する改革派の農業評論家もいた。子実トウモロコシに関するその後の推移はご案内の通りだが、それほどに我々の思考は過去の結果である「現在」に縛られている。

冒頭に紹介した日本人のカロリー摂取量データを使って以下のように話すことにしている。日本人の摂取カロリーのピークは1971年であり、その年を境にして摂取カロリーは減り続け、2004年に日本人が文字通り飢えていた終戦翌年（1946年）と同程度まで減り、その後も減り続けている。そして、1971年頃を境にして日本は欠乏の病理に苦しむ社会から過剰の病理社会に変わった。にもかかわらず、我が国の農業政策は欠乏の社会の農業政策が続いている。それはあたかも貧しい農民の存在と飢えが支配する途上国のような農業政策

である。だから、農業政策は失敗を続けるのだ、と。

農業経営には経営者の数だけ選択肢があつて良い。我々は、とかく語られる言葉に左右されるだけでなく、大きな歴史の流れの中で自らの行くべき道を考えるべきだ。

そして、「平成30年問題」を考えるなら、7500円の直接支払いが無くなり、国による生産調整配分が廃止されることで慌てるだけでなく、日本人の人口構成の大きな部分を占める団塊の世代が70代になることで生じる変化にこそ注目すべきである。

これまで息子や孫の本心も知らずにコメ作りを続けてきた高齢農家も70代となって、「直接支払いも無くなることだから」という言葉を受けてコメ作りをやめる。少なからぬ集落営農も破たんする。それがどういう結果をもたらすのか。それは大きな歴史の転換点なのである。